時間と實在

上田大助

一

古代に於ては時間及び變化が比較的閑却され、實在は不變永恒なるものと考へられ、近代(殊に最近代)に於ては反之時間及び變化が甚だ重視されて、變化こそ反つて實在の眞相であり、變化的なるものが反つて眞の實在をなすとも考へられるに至つてゐる。從つて今日時間と實在との關係が特に重要なる哲學問題を成さなければならぬと言ふことは此處に特に言ふ迄も無いことであらうと思ふ。然るに從來の時間論は多くは一方に於ては時間の種類を種々に嚴密に區別することをせず、又他方に於ては實在の種類を明確に規定類別することが無いのであるから、何れの時間が何れの實在と關係するかゞ充分明かにせらるゝことを得ないのである。本論文は特に此點に注意して、前論文「種々の時間の關係に就いて」(哲學研究第二百十三號)に於て述べた立場(認識論に於て構成主義を取る直接經驗說の立場)から此問題を(時間論

の一部として)考察して見度いと思ふのである。然し茲に言ふ迄も無く時間と實在との關係の問題は一方時間其者の問題の外に、他方哲學の窮局目的である實在の問題を含むのであるから、哲學上至難の問題であり又極めて廣範圍に亙るべき性質のものであると考へられる。從つて此處には其の全般に亙つて詳細なる攻究を行はんとするものでは無く、唯其の最も重要なる點に就いて基礎的なる(或は基本的なる)二三の考察を施さんとするに止まるのである。卽ち本論文の目的は必しも詳細なる研究に入ることにあるのでは無く、寧ろ其の攻究の方針を新しく確定し、之れによつて其の大要を明かにせんと欲するにある。「種々の時間の關係」も、既に時間が或る意味に於て一つの實在であり又其處に考へられた心理(或は意識)、歷史、物理的世界等が皆夫々一種の實在である以上、時間と實在との關係が充分明かにせられずしてはその完全なる理解は期し難いのである。從つて本論文はまた前論文の補說としても要求せられるのである。

二

前論文に於ては其の出發點なる「吾人に直接確實なる經驗に立脚して認識論に於て構成主義を取る立場」に就いては餘り詳論する所が無かつたのであるが、本論文に

於ては實在の問題に觸るゝ關係から之れを充分詳しく說明する必要があらうと考へられる。殊に認識論に於て構成主義を取る立場は所謂先驗主義として從來動もすれば經驗主義に對立(或は反對)するものなるかの如く考へられて居るのであるから、此處に之れを一つに結合する以上充分なる說明が要求せられることゝ思はれるのである。

哲學を眞に嚴密確實たらしめんがためには常に吾人の直接經驗する所に立脚し且つ之れに終始しなければならぬと言ふことが總て直接經驗說の主張であると言ふことは一般に認められてゐる所であらうと思ふ。唯其の立脚せんとする直接經驗を如何なるものと見るか、又其の考察を進めて行く間に直接經驗せざるもの或は不確實なるものを誘導することが無いかどうか卽ち良く正しく經驗に終始するかどうか等の點に於て相異を生ずるのであつて、此處から種々異れる經驗說を見るに至るのであらうと考へられるのである。從來最も普通には經驗を感覺(質料)と同一視して之れを思惟と對立せしめてゐる。從つて經驗說と感覺論Sensualismとは殆ど同義語と解さるゝ場合がある。然るに近代に於ては一層深き(或は一層基礎的なる)經驗を認めて、物自體的なる直觀體驗を其の立脚せんとする直接經驗となすものが

ある。新カント派、西田博士㊀、田邊博士㊁等が之れである。今此等の物自體的なる直觀體驗及感覺(或は寧ろ知覺)が吾人の直接經驗する所であることに就いては恐らく何人も異議の無いことであらうと思はれるのであるが、然し吾人の直接經驗する所が單に以上のものに盡くるであらうか。他に經驗する所が無いであらうか。吾人は之れに對して更に多くのものを同じく直接に經驗し得と思ふのである。先づ其の第一は意識である。また多くの意識的要素(注意記憶反省內部知覺自我意識統一的意識等々)である。感覺も單に質料とせられずして感覺とせられる時は既に一つの意識的要素をなすのである。人によつては經驗卽意識と考へる人もあり(例へばフオルケルト㊂)、又デカルトが意識卽ち(Cogito)を最も疑ふことの出來ぬ直接事實と考へた事も周知のことである。ベルグソンに於ても同樣であり㊃、且つ其の意識の直接與件として種々なるもの(意識的要素)が擧げられてゐる㊄。カント、フッセル等も亦同樣であると思ふ。次に其の第二は「思惟形式」概念意味價値等の諸形式的要素である。此等のものも質料的要素等と同じく吾人は之れを直接に經驗する。思惟することも吾人に直接であり、因果の概念等も直接であり、紅き、花、人、善惡等々何れも直接である(何等間接でも無く不確實でもない。)カントに於ても其の所謂先驗的原理は直接の

經驗に於て見出されたのであり、從つて彼は之れを特に「經驗的原理」と呼んでゐる。(六)フッセルに於ける意味本質等の分析も(其の「直觀」「體驗」に基き、專ら分析記述を事としつゝあることから見て其の直接經驗せる所を分析記述しつゝあるものと言はなければならぬであらうと思ふ。(七) 右の如く吾人の經驗に於ては以上の質料的、形式的及意識的の三要素は何れも同等に直接經驗せられ得と考へられるのである。かく此等の諸要素が要素として直接端的に經驗せられるのみで無く、又其の結合と考へられるもの(諸種の對象)が同じく直接に經驗せられると思はれるのである。知覺觀念情緒等の如きものが直接であることは特に言ふ迄も無いことと思はれるのであるが、より以上のもの(卽ち構成上より複雜なるもの)例へば机、人、家、景色、美等の如きものも又直接に經驗せられる所である。フェームが經驗の基礎と考へた「印象」は必しも要素的なるものではない。吾人の素朴的なる意識狀態或は經驗(或は全く自然的なる經驗)に於て如何に多くの複合體を含んでゐるかは殆ど自明の事であらうと思ふ。フッセルの「分析」等も之れによつて可能となるのでなければならぬ。複合體結合體が(それとして)直接に經驗せられると共に、また其の分析、分析の手續が直接に經驗せられる。心理學論理學等はかゝる分析の可能と其の手續の直證の可能とによつて

成立するのであると考へられる。然らばまた其の反對に構成及構成の手續が同じく直接なる經驗たり得なければならぬであらう。カントに於ては對象の認識、科學的認識が經驗であつたのみで無く、又其の構成及構成の手續が一々直接なる經驗であらねばならなかつたと思ふ(科學に於ては材料のみで無く構成の手續を一つ々々直接確實に經驗しつゝ進むのである)。佛敎に於ける「因緣所生の法」卽ち「空」或は「相卽相入」等の認識も亦同樣なる構成の直接認識でなければならぬと思ふ。かくの如く見來る時は吾人は直接經驗と言ふことは以上の如き諸種の經驗を總て含む所の極めて廣き意味に解し得るではないかと考へられるのである。勿論直接經驗と言ふことを右の如く廣く解すれば、其は殆ど經驗と言ふと全く同義となつて別に直接と言ふ文字を附する必要がないではないかとも考へられるであらう。若し之れを左樣に欲するならば別に「直接」を附さないでも差支はない。然し眞に直接確實なる經驗に立脚し、之れに終始し、些の假定、些の獨斷、些の不確實を容れず、其の構成分析の次第手續を一々直接嚴密に認識把握せんとする嚴格なる哲學的態度を、そのかゝる注意深さと嚴密性の故に特に之れを直接經驗の立場と言ふことは差支ないことであらうと思ふ。否從來多くの他の經驗說(例へばロック、アヴェナリウス、フォルケルト、ジ

ェームス等々)が多くの非直接なるもの、不確實なるもの、假定的なるもの等を導入含有することを思へば、以上の如き直接性嚴密性を絶對に失はざらんことを期する立場は特に之れを直接經驗の立場と言ふが寧ろ或は適當ではないかとも考へられるのである。而してカント、フッセル等の構成主義の立場をかく直接經驗の立場として考ふることは恐らく許さるべきことであらうと思ふ。何となればカントに就いては既に述ぶる所の如くであるが、今日のカント派にあつてはナトルプが之れを「純粹經驗論」[八]と名づけて居り、フッセルに於ては其の基礎とする所が純粹意識であり、之れによつて最も「嚴密なる學」を建設せんとしてゐるからである(フッセルは時に自己を實證主義者とすら呼んでゐる。「イデーン」二〇、三八頁)。桑木博士が「經驗論派は包括する所頗る廣いが、其意を精細に推窮すれば批判哲學となるに至る所がある」[九]と言はれるのも亦同じ解釋ではないかと思ふ。佛敎に於ける因緣所生の法卽空の認識が直接であることも周知の事であらうと思ふ。元より同じ經驗內に於て直接と間接との別が立てられなくはない。眞に直接端的なるもの卽ち眞に素朴的なる意識に於て經驗せられるもの或はこと、或は前記の質料的、形式的及意識的要素の多くは之れを直接的と稱し得られるであらう。ヴントは心理學を特に直接經驗の學と稱

するのであるけれども、吾人は他の多くの精神科學卽ち倫理學美學等をも同樣なる意味に於て直接經驗の學と稱し得と思ふのである。之れに對して構成的手續を多く經たものは之れを間接的とも稱し得られるであらう。ヴントは心理學に對して物理學を間接經驗の學と呼ぶのであるが、然し氏の心理學なる生理心理學の內には極めて多くの間接的なるものを含んでゐることは特に言ふ迄も無いことであらうと思ふ。然しかゝる構成的所產も(かゝる意味に於ては間接的であるとするも)其の構成の手續が一々直接嚴密確實であり又其の結果の認識が直接確實明證である限り、之れを直接なる經驗と呼ぶことも差支ないことであらうと思ふ。(今日の科學は之れによつて「實證的」の名を得てゐるのである。)反之吾人は如何にしても直接なる經驗と稱し得ないものを有してゐる。過去の出來事、未來の事、他人の經驗等が之れである。勿論過去と言ふこと、過去の出來事と言ふこと、未來といふこと、他人の經驗と言ふこと等は吾人の直接經驗する所である。然し過去の出來事其者、未來其者、他人の經驗其者等は如何にしても直接之れを經驗することは出來ぬ。此等は全然經驗を超ゆるもので、唯信仰要求として想定せられるに止まるものである。上記の意味に於ける間接經驗であることも出來ないのである。然し茲に其の信仰、其の想定

其者は疑ふことの出來ない自己直接の經驗であり得るのであつて、他の直接なるもの(例へば科學上の事實)との間に何等の相異を認め難いのである。而して過去、過去の出來事、未來、未來の事、他人の意識、他人の經驗(從つて畢竟他人其者等は夫々一つの構成(構成的所產)として考へられるのである。直接に經驗せられるのは唯自己の意識のみであり、「現在」のみである。自己現在の直接なる經驗に於て他人及過去未來等が(其等の信仰想定等が)、一つの經驗內容として經驗せられるのである。吾人は常に唯自己の經驗の外何者をも經驗し得ないのであるけれども、又同時に三世に亙る一切萬物を(直接に)經驗し得るのである。

以上の考察によつて從來の所謂經驗說と先驗主義或は構成主義とは、より大なる、眞の直接經驗に於て一つに結合せらるべきものであると言ふことがほゞ明かにせられたではないかと考へられるのであるが、吾人は直接經驗の事に關して猶一二の事實を注意しなければならぬと思ふ。

吾人の直接經驗に於ては質料的と形式的と意識的との三要素が夫々直接端的に經驗され、又具體的なる對象が此等要素の構成として認識理解されると言ふことは上に述ぶる所の如くであるが、經驗の要素の種類としては以上の三が總てゞあつて

第四の要素なるものは存在しないのである。プラトンは眞の實在を形式とするのであるが、猶他に感覺及意識(サイケ)を認めて居る。アリストテレスは實在を形式と質料とに二分するのであるけれども、其の形式には意識が(獨斷的に)結合せられて居る。カントに於ても形式と意識とが一つに結合して質料に對立せしめられて居る。(最近のカント派の人々がこの形式と意識とを分離せしめた事は既に充分知られて居る所であらうと思ふ。)ヘーゲルに於ても「イデー」は形式的であり又同時に意識的であり、又他に質料が之れより生成せしめられて居る。佛教に於ては主として質料と意識との二が(所謂「名色」として)考へられて居るのであるが、勝論等に於ては句義なるものが認められて居る。以上夫々見方を異にするのではあるが、質料、形式、意識の三者以外他の要素を認めない點に於ては皆一致するのである。本體論が唯物論と唯心論とを分つ時にも同じく此三要素が考へられて居るのであつて何等第四の要素を考へる所が無いのである(唯心論には意識のみを考ふるものと形式のみを考ふるもの等の別があるけれども他の要素を考ふるものはない。又不可知的一元論も何等新しい要素を考ふるものではない。)

次に注意すべきことは此等各經驗要素の獨立性と結合性とである。此等の各要

素は互に異質的であつて、各獨自の特性に於て互に他と區別して認識され得るのであり、また其各が何れも直接端的に經驗せられ得るのである。プラトン等に於て此等の要素が皆離れ〳〵のものとして見られて居るのも之れに由るものでなければならぬと思ふ。形式と質料との對立は既に久しく認められて居る所であるが、此等と意識(狹義の意識、本書の所謂意識的要素)との對立獨立も同樣に認められ得るのである。近時の新カント派の人々(十)が此事に注意せる事は既に述べた所であるが、佛敎に於ける五蘊和合說の如きも亦此事を談るものでなければならぬと思ふ。卽ち此等の各要素は經驗の窮極的要素を成して居るのである。從つて其は互に他から導出することは出來ない。(フィヒテ或はヘーゲル等の如く意識或は「イデー」等から他の要素を導かんとすることは誤りでなければならぬ。)經驗の三要素はかく互に獨立なるものではあるけれども、又之れと同時に互に相結合することを本性とするのである。形式と質料との結合(「對象」)、意識と形式との結合(カントの意識、アリストテレスの形相等)、質料と意識との結合(感覺、知覺等)等があるのみで無く、また三者の同時的結合がある(「人法一如」、「意識一元」等は此時を言ふものであらう。)個々の結合が經驗せられると共にまた全體の結合が經驗せられる。

次に經驗は不斷の變化である。經驗の要素が不斷に去來轉變しつゝあると共に(時に或は殆ど質料のみが經驗され、時に殆ど意識のみが經驗され、時にはまた形式對象のみが經驗せられる)、また對象(眞善美の各種對象)が不斷に出沒去來交代しつゝある(或る時には專ら道德的對象のみが經驗され、他の或時は美的對象のみが經驗され、また他の或る時は自然物の如きものゝみが經驗せられる。)また其等一つの對象に就いて見ても、それが無時間的に或は瞬間的に(一擧に)構成される(或は出現する)と言ふことは無く、徐々に(或は微分的時間に於て)構成され或は解消するのである。のみならずまた經驗の「全體」が「無」より「有」に、「有」より「無」に不斷に轉變しつゝあるのである。不斷に「流出」しつゝあると共にまた不斷に流入しつゝある。卽ち經驗の內容に就いて見ても、また其の全體に就いて見ても經驗は不斷に「生住異滅」しつゝあるのである。(經驗は、構成卽ち所謂「因緣所生」の故に「空」と言はるべきと共に、また以上の如き變化轉變の故に「空」と言はるべきものであらうと思ふ。)古代に於ては經驗のかくの如き變化が充分注意せられず、經驗は多く靜的に考へられたのであるが、近代ベルグソンの哲學等は特に此點を注意力說しつゝあるのである。然しベルグソン等の哲學が未だ經驗の變化の眞相を如實に把へてゐるものでないと言ふことは旣に屢々述べた

所である。而して言ふ迄も無く變化と言ふ概念は不變との對立に於て成立し得るのであるから、經驗のかゝる變化と共に他方常に不變(不變の概念)が經驗されつゝあらねばならぬ。卽ち變化の內に於て不變が(寧ろ不變と言ふことが)絕えず經驗されつゝあるのである。超時間的或は無時間的と言ふことも、時間の經驗との對立に於て考へられることなのであるが、經驗の激しき變化の內にあつては其等の時間的經驗をも全く失ふことがあり得るのである。變化の經驗其者、時間の經驗其者がまた去來する一つの經驗をなすのである。

猶意識と言ふことに就いては廣義の意識(所謂意識內容をも包含する意識、或は素朴的意識狀態と言ふが如き意識或は無意識無心忘我の經驗を意味するが如き意識)と狹義の意識(意識の意識、知覺の知覺など言ふが如き)とを區別すべきであるが、本書の所謂意識的要素とは言ふ迄も無く後者でなければならぬ。卽ち經驗の總ての異質的要素と區別されたる純粹獨立なる意識を指すのである。廣義の意識は此狹義の意識卽ち眞の意識と他の要素との(自覺的或は無自覺的)結合を言ふものに外ならぬ。他人の意識が唯考へられたるもの卽ち唯一種の對象たるに止まつて、直接經驗中に於て何等意識的要素を成すものでないと言ふことは茲に特に言ふ迄もないこ

とであらうと思ふ。意識は直接には唯自己の意識があるのみである。吾人は直接經驗と言ふことを右の如く理解して次の考察に進み度いと思ふ。

㈠ 西田博士「自覺に於ける直觀と反省」跋三頁、同「現代に於ける理想主義の哲學」九八頁、一一三頁等。

㈡ 田邊博士「科學概論」第一章第一節。

㈢ J. Volkelt, Erfahrung und Denken.

㈣ Bergson, Creative Evolution (Engl. translation) p. 1.

㈤ Bergson, Essai sur les données immediates de la conscience.

㈥ Kant, Kr. d. r. V., 2. Aufl. S. XII (Vorrede)

㈦ Hussorl, Ideen, § 20, S. 38 u. 39.

㈧ P. Natorp, Philosophie, ihr Problem und ihre Probleme.

㈨ 桑木博士「カントと現代の哲學」二四六頁。

㈩ ニコライ・ハルトマン、マルック、バウホ等。

三

却說時間と實在との關係の考察には前にも述べたる如く、一方時間の種々を嚴密に區別分類すると共に、また他方實在の種類を種々に區別して考察することが必要である。然らざれば如何なる種類の時間が如何なる種類の實在と關係を有するかゞ明確に決定されることが出來ない。從來の時間論は此點に充分の注意を拂ふこ

とをせず、實在に關しても時間の場合と同樣に、多くは之れを單一に考へんとする。或は唯其の一象面をのみ考へんとする。又之れを吾人の直接經驗する限りに於て考察すると言ふ嚴密性に立たざる結果として種々の不確實なるものを混入することゝなり、總てが曖昧なるものとせられる。前者からは不明析性が由來し、後者からは不確實性が由來する。エドアルト・フォン・ハルトマン(Kategorienlehre)、フォルケルト(Phänomenologie und Metaphysik der Zeit)等は元より、ベルグソン、ハイデガー等の時間論も亦之れであると思ふ。夫故本書に於ては特に此二つの點に就いて深き注意が拂はれなければならぬのである。時間の種別に就いては既に前論文に於て考察する所があつたのであるから、此處には專ら實在の種別に就いて考察せらるべきであらう。

實在に對する見方は從來人によつて種々甚だ相異するのであつて、例へばマッハの如き人は之れを質料的感覺的なるものと見、プラトン、ヘーゲル等は之れを形式的なるものと見、バークレー、ショーペンハワー等は之れを意識的なものと見る。佛教の法(法身、法性)はまた此等とも異る甚だ具體的なるものである。唯物論、自然主義、唯心論、有神論等夫々見解を異にする。然らば今本書の如き直接經驗說の立場に於て

は實在は如何なるものと見られるのであらうか。またそれは如何なる種類に分類せられるのであらうか。

直接經驗說の立場に於ては總てその直接に經驗する所以外に實在を求むることをせず、其の直接の經驗其者を以て直に實在其者とする。(シュッペ、マッハ、西田博士㊀、桑木博士㊁等皆之れである。)從つて此立場に於ては實在は總て直接確實に經驗(從つて確證)され得ることとなるのであつて、其處には最早や何等「不可知」なるものは存在し得ないのである。實在は殘り無く、總て嚴密確實に檢討せられ得るのである。また其の經驗其者が唯一絕對の實在であるから、其處には總て絕對性が樹立し得られるのである。總てが絕對的に確實たり得るのである。尤も吾人の直接經驗に於ては、吾人の直接經驗せざる所のものを信仰要求として樹立すると言ふことはあり得ること前節に述ぶる如くであるけれども、然し此場合に於ても直接には唯其の信仰要求の事實を現在直接の經驗として認めるに過ぎないのであつて、其の超越的に信仰要求せられる對象其者(例へば神)を直接なる現實的實在として「如實に」認めるのではないのである。唯其の信仰要求が(之れのみが)一種の構成として經驗內に存在するのである。從つてそれはまた確實なる事實を成すのである。(「アトム」、「自然」等が構

成的所產なるが如く、過去、歷史、他人、神等が構成的所產なのである。）かく直接經驗說の立場に於ては其の經驗する所の總てが實在（廣義に於て）と稱すべきこととなつてゐるのであるが、其の內に於てもより直接的、より根元的、より基礎的なるものと、より間接的なるもの、導かれたるもの、派生的なるものとが區別せられ得るのであつて、前者は通常狹義の「實在」と呼ばれ、後者は「現象」と稱せられて居るのである。前者は主として哲學の對象であり後者が主として科學の對象を成すことも一般に認められてゐる所であらうと思ふ。然し廣義には「現象」も亦實在であつて、科學がまた實在の學と稱せられることは周知の事であらうと思ふ。（反對に廣義には「實在」も亦一つの現象であつて、「實在」の學が屢々「現象學」と呼ばれて居るのである。）吾人は實在を最廣義に解するのである。

然らば右の實在は如何に分類するが便利或は至當であらうか。吾人は之れをより根元的なるものからより派生的なるものに段階的に區分して次の如くするが便利ではなからうかと考へるのである。即ち(一)終局的太源としての「無」（佛敎の所謂涅槃等）、(二)現實的「全體」、(三)各種根本原理即ち實在構成要素、(四)現象即ち各種の對象或は世界。茲に(三)の實在構成要素は實在の本性の學としてのオントロジーに於て

攻究さるべきものに屬すと考へられるのであつて、從來の唯物論、唯心論、二元論、不可知的一元論等に對して吾人は之れを質料的、形式的及意識的要素の三として確立せんと欲するのである(前節)。(四)の各種對象は眞善美の區分に從つて分類せられ、科學としては先驗的科學と經驗的科學とに、また後者は自然科學と文化科學(或は精神科學)とに分類せられるであらう。また時間の事に關しては無時間的或は超時間的實在と時間的實在とが區別せらるべきであらう。而して超時間的實在としては論理、數、理念、價値、道德、宗敎、美(但し時間に關係なき範圍)等が擧げられ得るであらう。時間的實在としては言ふ迄も無く物理的世界、生物學的世界、歷史等の如きものが擧げられるのである。(數學は論理學等と同じく先驗的科學として數へられるものであるけれども、後に述ぶる如く理論的にも時間と密接なる關係を有し、又歷史的には時間と數との關係が絕えず論議せられて居るのである。)「存在する」Ｄｅｓｅｉｎと言ふことにも無時間的或は超時間的と時間的とを區別すべきであつて、前者は本來時間には關係を有せざるものであるが、時間と關係的に考へられる時始めて不變と考へられ得るのである。超時間的なる「永遠」と時間的なる「不變」とは異る概念でなければならぬと思ふ。(從つて前者の內には必しも不變と考へられざるものがある。瞬間の美等は

之れであると思ふ。）不變と變化とは唯時間的存在に就いてのみ言ひ得ることでなければならぬと思ふ。（而して吾人が或る場合には時間を經驗し、或る場合には時間を經驗しないと言ふことは吾人の常に經驗しつゝある所である。）

時間と實在との關係の考察は、例へば以上の如く分類されたる實在の一つ一つに就いて、其の時間（之れにも極めて多くの種類があるのであるが）に對する關係が攻究せられなければならぬのであつて、かくして始めて實在（其の「全體」、各實在要素、各種對象等）の時間的構造が充分明確に把握せられることが出來るのである。本源的なる「眞の時間」は甚だ單純でもあり、「直觀の形式」として唯質的にのみ關係するに止まるのであるが、加工思惟せられたる時間は一種の範疇としてまた實在の論理的構造にも參加するのであるから（後述參照）、夫々の部門對象に就いて精細なる攻究をなすに非らざれば充分明確なる認識に達することは困難であらうと考へられるのである（物理的時間の如きは物理學內相對性理論によつて始めて其の眞性が明かにせられたのである。）

「無」及「全體」（上記分類、（一）及（二））と時間との關係に就いては既に前論文に於てほゞ考察する所があつたのであるから、此處には專ら各實在要素（三）及各種對象（四）と時間

との關係を考察し度く思ふのである。

㈠ 西田博士「善の研究」第二編第二章、同「現代に於ける理想主義の哲學」一五六―一五九頁。

㈡ 桑木博士「カント現代の哲學」四四〇頁。

四

實在を右の如く區分することゝして、先づ其の各實在要素と時間とは如何なる關係に立つものであらうか。抑また時間とは如何なる實在であるか。

時間には本源的基礎的なる「眞の時間」と之れから導かれた種々の(加工されたる)時間との別があることは前に述べた所であるが、時間の本性を成すものは言ふ迄も無く前者であるから、此處では前者卽ち「眞の時間」が考察の主たる對象とならなければならぬ。

却說然らばその「眞の時間」の本性は如何なるものであらうか。其の實在性は如何なるものであらうか。吾人直接經驗說の立場に於ては直接なる經驗卽實在であるから、時間が直接吾人に經驗せられる限り、其はまた一つの實在でなければならぬのである。然らば其は如何なる種類の實在であらうか。それが唯一の實在或は(ベルグソンの或は考へるであらう如く)實在の本質を成すものでないことは甚だ明かな

ことであらう。何となれば吾人は時間の經驗の外他に種々の重要なる經驗をなすのであり、又時としては時間の經驗をしないこともあるからである。卽ち時間が實在の「全體」或は本質でないことは之れによつて明かである。然らば時間は如何なる種類の實在であらうか。先づそれが單純なるものであり又質的であることから、それが構成的所產(四)の屬で無く實在要素(三)に屬すべきものであることが明かである。然らば其は前記三種の實在要素の中何れに屬すべきものであらうか。形式的要素(「イデア」、「ロゴス」等)が無時間的であることは甚だ明かであるが、意識的要素も亦其自身としては(純なる要素としては)時間的ではない。自我の意識、意識の意識等其自身としては無時間的なる經驗である。然らば時間は當然質料的實在とせられなければならぬであらうと考へられる。從來の經驗說(心理學、マッハ、カント等)も皆之れを質料的なる實在となしてゐるのである。(カントに於ても時間は單なる「イデー」としてでは無く、感性の形式として經驗的實在性が與へられてゐるのである。唯カントに於ては其の考察せる時間に於て眞の時間の本性たる質料的要素と本來形式的要素たるべき範疇とが混在せることに對して充分明瞭なる注意が拂はれなかつたものと考へられること既に述べた所の如くである。)茲に之れを「感覺」と稱すべきか、或

は「知覺」と名づくべきか、或は「直觀の形式」と呼ぶべきかは左程の問題ではないと考へられるのであるが、吾人は之れを「直觀の形式」と名づくるが或は最も適當ではないかと思ふのである。心理學に於て之れが知覺と稱せられるのは、恐らくそれが常に諸他の感覺と結合して常に「感覺の群」を構成するに由るものであらうと思はれるのであるが、然し常に他の感覺と結合するとしても、それの獨特にして且單一なる性質が充分判明に認められる以上、之れを一つの獨立なる要素として感覺と呼ぶこと(例へばマッハの如く)も何等差支ないことではなからうか。或は又之れをカントの如く「直觀の形式」と名づくることも恐らく差支ないと思ふ。何となれば此處に「直觀の形式」と言ふのは「思惟の形式」との對立に於て呼ばれるのであり、從つて其は「感性の形式」として質料的なる意義を有するからである。勿論「我々は時間から現象を取去ることは十分出來るのであるけれども、現象一般に關して時間其者を除去することは出來ぬ」㊀と考ふるが如きことは(直接經驗の立場から)許されないことであるが(此事は既にヴント㊁、ウ・ジェームス㊂等の如き人によつて充分注意せられて居る所である)、然し其の意味する所が時間の普遍性を言表さんとするに在ると解するならば、それは充分正當であり、心理學の所謂知覺と其の意義を等しくするものであると思はれるので

ある。直觀と言ふことに就いても、カント(『感性論』)は主として物的現象に就いて考へて居るのであるが、こはまた廣く精神的現象にも言ひ得られることであつて、今例へば眼を閉ぢて或る事を冥想しつゝあるが如き場合に於ても時間は知覺せられるのであるが、吾人は之れをも廣義に於て直觀と稱し得と思ふのである(恰かも內部知覺など言ふが如く。)吾人が時間を「直觀の形式」と呼ばんとするのは廣く此意味に於てゞある。かく吾人は時間(眞の時間)を知覺と言ふも「直觀の形式」と呼ぶも、殆ど何等の相異が無いと思ふのであるが、唯前者が久しく心理學上の用語として用ひられてゐるために、自ら常に心理的意識を前提するかの如く思はれると言ふ理由から、直接端的なる事實(經驗)をより良く言い表すものとして後者がより適當ではないかと考へるのである。

かく吾人は時間(眞の時間)を實在要素とし、形式的要素及意識的要素と區別する意味に於て之れを質料的實在と名づけ度く思ふのであるが、それが通常の所謂質料(所謂對象を構成する要素となるべき質料)と異るものであることは特に言ふ迄も無いことであらうと思ふ。此等の質料に對しては時間は(それが普遍的なる點に於て)寧ろ(カントの如く)形式と稱すべきが或は適當であらうと思はれるのである。(吾人が

カントに從つて「直觀の形式」と呼ばんとするのも之れによるのである。）而してかゝる直觀形式としての時間は言ふ迄も無く、單に一つの形式、一つの實在要素たるに止まるのであつて、それが現象の全體に關係すと言ふも何等能動的或は生產的の意味を有するのではないのである。そは言はゞ唯附加的に之れに關係するに止まるのである。（時間は色を左右することも出來なければ又音を產出することも出來ぬ。）時間に於ては唯諸對象が相繼起すと言ふに過ぎないのであつて、對象の創造は別の原理によらなければならぬのである。從つてベルグソン[四]、或はブロチノス[五]等の如く時間を能動的或は生產的實在、從つてまた一種の「力」なるかの如く考へるのは誤りである。ヘーゲルに於ても或は時間を一種動的なる或者と見んとする傾向が存するのではないかと考へられる（例へば「總てのものが時間の內に生滅去來するのでは無く、時間其者が此轉化である」等[六]）。コヘン[七]に於ても時間が一種生產力あるものとせられて居るのであるが、其處では眞の時間で無く專ら物理的時間が考へられて居るのである。而して物理的時間の如きものに於ては時間が或程度迄構成的原理として作用すると考へられること後に述ぶる如くである。）時間はたゞ現象（時間的現象）の「條件」を成すに過ぎないのである。

右の如く時間(眞の時間)は一種の質料的實在であつて、直觀形式として一般には唯現象の「條件」を成すに過ぎず、所謂論理的意味に於て對象の構成原理たることは出來ないのであるけれども、思惟によつて加工されたる時間は(その範疇との結合によつて)論理的意味に於ても對象の構成原理となり得るのである。(或る意味に於ては所謂質料をも夫々對象の構成原理――構成原理の一――と考へ得るのであるが、思惟によつて加工されたる時間は更に論理的意味に於て構成原理と稱し得られると思ふのである。)「前後の關係」、「因果の關係」(時間的)(自然科學上の因果のみで無く、廣く歷史的因果、因果應報等の因果をも含む)等と言ふことはかゝる時間によつて可能となるのであるが、かゝる「關係」は一種の實在であり、また一つの對象である。(ポアンカレーの如きは關係のみを唯一の實在と考へる。)[八] 殊に物理學に於ては時間は最早や單なる質(形式)では無く、一つの量であり、又因果は一つの函數的關係となつて居るのであるから、論理的意味に於ても時間は一つの有力なる構成原理を成さなければならないのである。近世物理學が始めより時間を實在(或は實在要素)として考へんとしたのは之れに由るものであらうと思はれるのである。(此意味に於てコヘン[九]が時間を以て生產力あるものとなすことも充分正當であると考へられるのである。カン

トの圖式論に於ては時間が範疇と現象との媒介とせられてゐるのであるが、若し之れを上記の如き意味に解すれば其は充分正當なる意義を有することゝなるであらう。然る場合には上述の如く單に媒介としてゞ無く、極めて有力なる構成的原理として重視されなければならぬのである。然しカントに於て右の理論が果して如何程迄考へられて居たかは甚だ疑問であると考へられる。何となれば既に述べたる如くカントに於ては感性形式としての眞の時間と數量化されたる物理的時間との區別が未だ充分明瞭で無く、從つてその物理的時間の構造が充分明瞭に理解されて居たと言ひ難いと思はれるからである。少くとも圖式論に於て此關係が充分明かにせられてゐないと言ふことは恐らく異議の無い所であらうと思ふ。(此點猶後述參照。)劇、音樂等の美的對象には眞の時間が、單に條件としてのみでなく(或る意味に於て論理的に)一種の構成原理として參加するのではないかと考へられる。

以上吾人は時間其者に就いて眞の本性、其の實在性を明かにせんとしたのであるが、更に時間が他の實在要素卽ち形式的要素並に意識的要素に對する關係は如何なるものであらうか。先づ始めに注意すべきは其等要素の相互獨立性である。既に前節に於て述べたる如く此等の要素は實在の異質的なる要素として互に獨立なる

ものであつて、其の何れも互に他より導き出すことが出來ないのである。從つて一方時間から諸他の要素を導き出すことが許されないと共に(ベルグソン等が此點に於て誤りを犯してゐると言ふことは既に述べた所である)また他方形式的或は意識的要素から時間を導き出すことも許されないのである。夫故例へばヘーゲルが(論理的形式的原理である)「イデー」から時間を導かんとするが如きは誤りでなければならぬ。コヘン等が時間を「思惟」から導かんとすることもまた同樣に誤りでなければならぬ。(コヘンに於ては前にも述べた如く眞の時間と量的なる物理的時間とが充分區別せられること無く、殆ど無批判的に後者のみが考察せられて居るのであるから、其の物理的時間に於ける數量的要素が思惟に由來すとせられることは元より當然であらねばならぬ。然し茲に注意すべきことは、唯其の數量化が、之れのみが思惟に由來するのであつて、時間の本性は毫も之れと關係が無いのであるから、之れを時間其者が思惟に由來するものなるかに論述することは大なる誤りに導かなければならないのである。)同樣にまた意識から時間を導き出さんとすることも許されないのであつて、例へばプラトン(ティマイオス)、プロチノス、オーガスチン等の如く神(世界靈卽ち意識)が時間を作つたとするが如きことは誤りである。(意識は時間の創造

者でも無く、また意識と時間とは直に同一でもないのである。）

かく時間は他の實在要素に對して自己獨立性を有するものではあるけれども、また他方此等の要素と容易に結合することが出來る。其の思惟と結合して種々の時間を構成することは既に前論文に於て述べた所であるが、其はまた意識的要素とも極めて容易に結合する。一方に於ては意識が極めて容易に全實在を掩ひ、之れと結合し得るものであり、他方に於ては時間がまた總ての現象と關係し得るのであるから、此兩者の結合は最も容易に行はれるのである。（フッセルの現象學的時間はかゝる結合に於ける時間である。）從つて或る場合には此兩者の獨立性、分離性が充分注意せられずして、それが一つの不可分的渾一體なるかに考へ、時間を以て意識（或は精神）の一要素（與件）と考ふるにも至るのである。ライプニッツ、カント、ベルグソン等何れも之れである。（ヘーゲルに於てもかゝる傾向が認められる。即ち例へば「時間は自我‖即ち純粹自己意識の自我と同じ原理である」[九]等。フォルケルトも時間を意識との關係より導き出さんとし、[十]ハイデガーも時間性を彼の所謂ダーザインに基き現象學的方法によつて考察する限り、時間を意識との必然的關係に於て考ふるものと言はなければならぬと思ふ。）然し時間は必ずしも常に意識（意識の意識、自我の意識等

吾人の所謂意識的要素)と結合すべきものではないのであつて、例へば吾人が熱心に物理現象に注意しつゝある時多くは意識的要素を經驗しないのである。時間を「運動の數なり」と定義するとか、近世物理學が時間を一つの實在(意識を離れたる)と考へる等は之れによつて可能となるのではないかと考へられる。古代に於て意識が未だ充分發達せず、意識的要素が餘り經驗せられざる狀態に於て、外界に時間が經驗せられて居ることも亦此事を示すものであらうと思ふ。或は反對に意識のみが經驗せられて時間が經驗されないことがある。例へば自我は他人と對立して道德的關係を構成し、神と對立して宗教的關係を構成し得るのであるが、此等は何れも超時間的經驗であつて、直接時間との關係を有しないのである(愛、法悅等)。かく時間と意識とは各獨立なる經驗(實在)であつて、常に不可分的結合に於てあるものでも無く、又殊に前者が後者の要素與件を成すと言ふ可きものではないのである。然し若し意識的要素と言ふことをかく嚴密に區別すること無く、意識を廣義に解して、經驗を總て意識と稱することゝすれば、「意識卽實在」、「實在卽意識」となるのであるから、時間は最早や意識と獨立なるを得ず、常に其の一內容一要素として考へられなければならぬことゝなるであらう。然しかゝる場合には單に時間のみで無く、他の要素例へば形

式的要素等がまた同じく意識の要素と見做さるべきことゝなるのである。（カントに於ては時間が意識の要素とせらるゝのみで無く、形式的要素が意識の要素とせられてゐることは既に述べた所である。吾人は之れに對して狹義に形式と意識とを分離しなければならぬと考ふると共に、また時間と意識とを分離して考へなければならぬと考ふるのである。）

① Kant, Kr. d. r. V., 2te Aufl. S. 46, Metaphysische Erörterung des Begriffes der Zeit (§ 4), (2)

② Wundt, Logik Bd. I. 3te Aufl. S. 468.

③ W. James, Principles of Psychology, Vol. I., p. 619.

④ Bergson, L'Evolution Créatrice, p. 367 ; pp. 369—370.

⑤ "For in an energy of this kind, this world was generated. And this energy indeed is time." (Plotinus selected works, Thomas Taylor's translation, Bohn's popular Library, p. 137.)

⑥ Hegel, Encyclopädie, § 258.

⑦ Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, 3te Aul. S. 152 ; 162 ; 193.

⑧ Poincaie, La Valeur de la Science, Introduction ; Chapitre XI.

⑨ Hegel, Encyclopädre, § 258.

⑩ J. Volkelt, Phänomenologie und Metaphysik der Zeit. III, S. 25—26, S. 140, S. 179.

五

時間(眞の時間)其者の本性並に他の實在要素(形式的並に意識的)に對する關係は以上述ぶる所の如くであるが、次に此等要素によつて「構成」せられた實在、諸種の對象或は世界(分類(四))と時間との關係は如何なるものであらうか。以下其の主要なるもの二三に就いて考察せんとする。但し超時間的なるものと時間との關係に就いては既に幾分觸れる所があつたのであるから、此處では專ら時間的實在に就いて考察せんと欲するのである。

考察の順序は前述の實在の分類(四)に從ひ、構成の簡單なるもの卽ちより基礎的なるものから次第に複雜なるものに及ぼして行くが便利であらうと考へられる。然かすれば時間の要素が各種對象に如何に關係參加するかの具合(構成)が簡單なるものから一歩々々次第に明かにせられることが出來るであらう。

(一)數と時間

數は言ふ迄も無く論理的思惟の構成的所產である。從つて其が時間と異るものであることは言ふ迄も無いことである。數、論理等は所謂超時間的實在であつて、時間(眞の時間)とは獨立なる實在であることは初めに述べた所である。然しまた數は全然時間に關係なきものでは無く、時間(眞の時間)の協働無くしては數は成立するこ

とを得ないのである。何故と言ふに「數は反覆から生ずる」㊀のであるが、其の「反覆は時間を豫想する」㊁からである。卽ち數は時間と思惟(或は之れに直觀を加ふ)との協働によつて成立するのである。卽ち數の基礎には時間(眞の時間)が存在する。(反對に時間の基礎には數は存在しない。眞の時間は純粹に質的なる要素的實在である。然し物理的時間の基礎には數が存在しなければならぬことは既述の如くである。)(古代以來數と時間とを同一視した事の內に果して如何程迄此理論的基礎が意識せられてゐたかに就いては、吾人は未だ之れを充分明かにし得ないのであるけれども、古代以來時間は常に殆ど唯物理的時間のみが考察せられて、未だ眞の時間が充分注意せられなかつた事から考ふれば、此理論的基礎は殆ど意識せられずして、唯物理的時間の數量的關係と數との同一性が意識せられたに過ぎないのではないかと考へられるのである。「時間とは日月星辰の運動に外ならぬ」とか或は「時間は運動の數なり」と定義した等の事に見ても此等の事が認められ得るではないかと考へられるのである。カントに於ては直觀形式としての時間卽ち眞の時間と數量的時間との混同があつたこと既述の如くであり、從つてカントが時間と共に數を論じて、例へば「算術は其の數の概念を時間中に於ける單位の繼起的添加によつて成立せしめる。」㊂等と

言ふ場合に於ても此數成立の基礎的理論が充分明瞭に意識せられて居たものと見ることは出來難いのではないかと考へられる。コヘンに於ても眞の時間と物理的時間とを充分區別することなく、殆ど唯後者のみが問題とせられて居るのであり、また其處には時間が一つの範疇として樹立せられて居るのであるから、從つて「時間がまた有限數に導く」(四)等と言ふ場合に於ても、それが上記の基礎理論を充分的確判明に言ひ表したものであるかどうかは甚だ疑はれるのであつて、恐らく唯物理的時間と數との論理的同一性が意味せられるに過ぎないのではないかと考へられるのである。少くとも眞の時間と數との基礎的關係が充分明瞭に意識せられてゐたとすることは出來ないであらうと考へられる。)

物理的時間と數とを直に同一と考へることも亦正當でない。何となれば物理的時間には猶幾分時間性(「眞の時間」の性質)が保持せられてゐるのであるが、數(既に成立して居る數)には最早や全く時間性が存在しないからである。のみならず物理的時間は(今日の物理學が充分明かにして居る如く)數よりも寧ろ空間との結合(直接には)によつて成立するものである。茲に空間とは言ふ迄も無く物理的空間であつて、從つて其處にはまた數が基礎として參加して居ることは勿論無視することは出來な

いのであるけれども、それが既に空間である以上其處には單なる數以上、質的なる感性的空間が參加存在しなければならぬのである。從つて空間との結合による物理的時間は單なる數以上遙かに多くのものを有するのである。(物理的時間の空間性は相對性理論の所謂「世界」なる四次元空間の構成に於て最も明瞭に表現せられるのではないかと考へられる。)數は唯時間(物理的時間)と空間(物理的空間)との數量的基礎として共通に參加するに過ぎないのである。即ち唯量的關係を媒介するに過ぎないのである。若し物理的時間が全く數と同一となり、其の時間性が全く失はれてしまつたならば、「運動」と言ふことが全く不可能となり(ヅェノーン等の如く)、物理學は終に成立し得ざるに至ると考へられる。

物理的時間以外の諸時間が數と關係なきことは既に前論文に於て述べた所である。

(二)空間と時間

空間には感性的空間(通常の所謂空間)と非感性的空間との別があり、又前者には質的なる知覺的空間と量的なる幾何學的空間、物理學的空間等の別がある。知覺的空間にも極めて多くの種別があり、[72]幾何學的空間及物理學的空間にも亦甚だ多くの種

類がある(質的なる幾何學的空間も存在する)。非感性的空間にも數學的思惟による四次元以上の多次的空間及「意識の場」とも稱すべき具體的內容的空間等の別がある。今此處には唯(從來最も多く考察の對象とせられた)物理學的空間のみに就いて一般的なる考察を行はんとするに過ぎないのである。從來の時空論は多くは一方に於ては時間の種類を充分區別することなく、他方に於てはまた空間の種別を充分明かにしないのであるから、其の所論が甚だ不明瞭たるを免れない。カント、コヘン(及ナトルプ)、ヘーゲル、ハイデッガー等何れも之れであらうと思ふ。(ボアンカレーの如き人も或る個所に於ては其敍述が甚だ不明瞭である。後述參照。)唯物理的時空のみに就いては今日の相對性理論によつて(卽ち物理學と言ふ嚴密なる經驗科學の內に於て)、其の關係が嚴密判明に考察せられてゐるのである。

空間(知覺的空間卽ち本源的なる質的空間)と時間(眞の時間)とは(心理學等が既に充分明かにしてゐる如く)夫々獨立なる一つの知覺(或は「直觀の形式」)であつて、其間に何等從屬的或は論理的關係が存すべきものではない。各々一つの資料的實在として實在の要素(他に還元することを得ない)を成すのである。(ヴントは此事を正當にも「或る現象に於て時間を抽象することが出來る——卽ち例へば唯其の質的及空間的

性質に注意することによつて」[七]と言ふ語によつて言ひ表してゐる。）唯物理的空間と物理的時間とが思惟卽ち數によつて結合せられてゐるのである。それは唯數によつて結合せられて居るのみで無く、又空間によつても結合せられて居ること前に述べた所の如くである。夫故其の結合は極めて緊密なるものと言はなければならぬ。相對性理論の所謂「世界」は此事を最も明瞭に示すものであらうと思はれる。（從つて相對性理論が時空の獨自性を否定して、唯其の兩者の結合にのみ獨自性を與へんとすることは誠に當然でなければならぬ。然し其は唯物理的時空のみに就いて言ひ得ることなのであつて、其他の時間及空間の間に於てはかゝる關係は存在しないのである。「我等の知覺の對象は常に場所と時とに結付いてゐる。而して時を離れて場所を認め、場所を離れて時を認めることは誰もしない」[八]など言ふことの一般的經驗の事實を言ひ表すものでないことは特に言ふ迄も無いことであらうと思ふ。）而してかく思惟の加工によつて物理的空間と結合した時間は最早や生ける時間（眞の時間卽ち「持續」）では無く、空間化した死せる時間であるから、時間としての獨立性を失ひ、「世界」の一次元に墮することゝなるのも當然と言はなければならぬのである。空間が時間より高次元であると言ふことも（例へばコヘン論理學[九]）、從つて唯物理學或は數

學的思惟に於てのみ言ひ得ることである。眞の時間と眞の空間(知覺的空間)との間に於ては寧ろ反つて時間がより高次的であるとも言はゞ言ひ得られるのであらうと思ふ(既にカントに於ても空間は唯外的現象の制約であるが、時間は一切現象の制約である。)

(右の如く物理的時空の間に於ては物理的時間は物理的空間を待つて始めて可能となるのであるのであるから、理論上空間がより先きであるとも言はなければならぬのであるが、また其の物理的空間の數量的基礎としては數が存在し、その數が眞の時間によつて可能となることを考ふれば、理論上時間眞の時間が空間物理的空間よりより先きであるとも言はなければならぬのである。然し其の物理的空間中には數にも時間にも關係なき感性的要素が存在するのであるから、之れを全然後なるものとすることも出來ないのである。「吾人は直線の形に於てのみ時間を寫象し得るが故に、時間の觀念は論理上空間の觀念より後である」など言ふことは眞の時空の間に於て言ひ得べきことで無いことは言ふ迄も無いのであるが、物理的時空の間に就いてもポアンカレーの指摘せる如く、[十一]恐らく正當ではないと考へられる。然しまた反對にポアンカレーの如く「時間は論理上空間に先立つ」[十二]と言ふことも、眞の時空の間

には言はるべきことではない。之れを物理的時空の間の事と解して、物理的時間が論理上物理的空間に先立つとすることも出來ぬことは前述によつて明かである。從つてこは眞の時間が數の基礎を成すが故に、時間が理論上物理的空間に先立つのであるとの意に解すべきものであらうと考へられる。現に「空間の數量的性質は何に由來するか。それは筋覺の系列が空間の生成に演ずる役前に起因する。卽ちこれは反覆せられる系列であつて、其の反覆から數が生ずる。……然るに反覆は時を豫想するから、從つて時間は論理上空間に先立つといふことになる」と言はれて居るのである。時間と空間との種別を明かにせざる事から、如何に多くの不明瞭と不明析とが生ずるかは、此等の事によつても充分明かであらうと思ふ。

（物理的空間以外の感性的空間及高次元の數學的空間等は直接には時間と關係することが極めて少いと考へられる。又「意識の場」と時間との關係に就いては既にほゞ考察した所の如くである。）

（三）具體的諸經驗對象と時間

或種の對象（物理學的世界、生物學的世界、劇音樂等の美的對象等）に於ては時間が論理的にも構成原理として作用すると言ふことは既に述べた所であるが、時間は更に

より一般的に對象の成立或は解消の過程として參加する。認識論(構成主義認識論)、論理學等は唯對象の論理的構造を攻究する(言はゞ靜的に)止まるのであるが、實際の生ける經驗に於ては對象は無時間的に或は一瞬の內に構成せられると言ふことは無く、常に幾何かの(或は極めて短き、或は相當長き)時間の經過に於て構成せられるのであつて、其の成立或は解消に關して時間過程を無視することは許されないのである。(普通の心理學にて於は具體的經驗の意識的方面に就いて「精神過程」が攻究せられて居るのであるが、吾人は之れと平行に其の對象方面に就いて對象過程の學が成立し得るのではないかと考ふるものである。所謂聯想律の如きも、單に精神過程の法則としてのみで無く、また同時に對象の去來交代の法則として見んと欲するのである。廣き意味に於ては精神の過程其者が卽ちまた一つの對象過程に外ならぬのである。)

今例へば物理學的世界は通常恒常不變なるものとして考へられてゐるのであるが(勿論物理學は運動を攻究するものであるから、此意味に於ては靜的なものと言ふことが出來ないのであるが、然しそれが方程式によつて一定に既成固定として表される限り、其は不變恒常なる實在でなければならぬと言ふことは既に多くの人々に

よつて指摘せられて居る所である)、吾人の直接經驗に於て其の實際如何にして構成せらるゝかを顧る時は、其は時間的過程の內に極めて徐々に構成せられるものであることを認めざるを得ない。(吾人日常の經驗に於ても例へば朝の美しき日出に對して、之れを美的對象とすることから離れて太陽を物理學的對象として認識し、其の地球に對する關係等を科學的に思考する迄には可なりの時間の經過を必要とする。實驗室等に於て一層精密に物理現象を確定樹立せんとする場合には更に一層多くの時間を要することは言ふ迄も無いことであらう。實在論者は或は之れを唯再認の過程に過ぎずとするであらうけれども、吾人直接經驗の立場に於てはかゝる過程は直に實在其者の成立の過程と見做さなければならぬのである。「再認」と言ふことは之れに伴ふ一種記號的な經驗に過ぎないのである。)而してまた(實際の經驗に於ては)其の成立した物理的對象が何時迄も其處に不動に停在すると言ふものでは無く、其は須臾にして解消して他の種類の對象(例へば美的或は道德的對象)によつて交代せられるのである(吾人の直接經驗が一瞬も不動固定に止まることなく不斷に流轉變化しつゝあることに就いては前々節に述べた所の如くである。)(佛敎に於ては特に自我に就いてそれが固定的な存在を成すもので無く、種々の要素から構成せら

れたものであること及それが日常不斷に「生住異滅」しつゝあることを認識論的に確定認識して居るのであるが、諸種の對象或は世界に就いても全く同樣なのである。夫故に時間的關係より言はゞ固定的なる物理學的世界はかゝる變化（「生住異滅」）の過程中の或る一瞬（出來上れる「住」の一瞬）を把へて、思惟によつて固定化したものと言はなければならぬのである。從つて其は言はゞ一つの「寫眞」である。吾人は思惟（或は理念）によつて此寫眞を以て永恒不動の實在と思惟するのである（卽ち唯單に思惟するに過ぎないのであつて、之れを如實に經驗するのではないのである。）而してかく思惟によつて固定化さるゝ實在（卽ち寫眞）は物理學の進步と共に不斷に變遷推移し「眞理」も常に改廢せられて居るのであるが、其の如何なる段階に於ても夫々常に固定不動として思惟せられてゐるのである。（卽ち思惟の固定化作用のみが常に一定に行はるゝのである。）（物理學的世界のかゝる寫眞的特性は既にベルグソン[注]に於ても充分明かに注意、指摘せられてゐるのであるが、其の構成の手續及解消の手續に就いて未だ充分なる注意が拂はれないのではないかと考へられる。又ベルグソンに於ては物理學的世界が生ける經驗卽ち氏の所謂持續的實在の流れの方向に直角なる方向の切斷面なるかに考へられて居るのではないかとも思はれるのであるが、若[注]

し實際左樣に考へられて居たとすればそれは誤りであつて、實際の經驗は遙かに具體的多次元的であつて、物理學的世界の如きは其の或る極めて特殊部分的なる切斷面に過ぎないのである。少くともベルグソンに於ては此等の事が認識論的に充分明確にせられて居るとは言ひ難いであらうと考へられる。）

美的對象、道德的對象等の成立解消（其の「生住異滅」）に就いても全く同樣に言ひ得ると思ふのであるが、唯此等の對象に於ては對象其自身の構造の內に時間的要素を含まないのであるから、之れが常に時間と關係せしめられて時間的不變として樹立せられることが無い（或は少い）に反して、物理學的世界は常に時間の觀念を去らず且つ固定化の作用を伴ふ可き思惟によつて構成せられる關係上自ら時間的不變の存在として思惟せられることゝなるのであらうと考へられるのである。

生物學的世界に就いても、例へば個體の成長に就いて吾人の直接經驗する所は、所謂「心的現在」に於て其の個體の或る一狀態を觀察して之れを「寫眞」或は標本として把持し得るに過ぎない。而してかくの如き斷片の多くを思惟によつて連接し、之れを其の連續的變化と思惟して之れを其の個體の成長過程と成すのである。（吾人の直接經驗が不斷に斷續しつゝあること及內容たる各種對象が不斷に去來交代しつゝ

あることは既に述べた所である。而してかゝる斷續の間に連接の可能となるのは同一の理念及再認の現象によること竝に其の連續的變化の可能となるのは直接經驗の生ける連續的變化に基く等のことは此處に特に言ふ迄も無いことゝ思ふ。個體の成長と共に考へられる長い時間が「眞の時間」ではなく、考へられた時間であることも甚だ明かである。）從つて其は唯左樣に思惟するに止まるのであつて、之れを如實に經驗するのではないのである。其は夫故言はゞ一つの活動寫眞である。其の寫眞の一枚々々が既に幾分の時間過程に於て成立するのであるが、此等の斷片を集めて一つの連續的過程たらしめるのにまた或る時間過程を要するのである。而してかくして構成されたる連續的過程（個體の成長過程）は唯「現在」に於て（現在の經驗に於て）かゝるものとして思惟されるに過ぎないのであつて、如實に經驗觀察さるゝのではないのである。進化及歷史の推移等に就いても全く同樣である（何れも活動寫眞的構成である。）

道德宗敎の世界も亦時間と關係する。歷史の如きは道德が時間と關することによつて成立するものであらうと考へられるのであるが、また種々なる時間的不死の世界（佛敎、基督敎、カント等）は宗敎が時間に關係するものであらうと考へられるので

ある。（吾人は歴史的時間とも異るかくの如き時間を「形而上學」的時間と名づけ度く思ふこと前論文に述ぶる如くである。）

經驗の「全體」卽ち實在（直接なる實在）の全體に就いても同樣に或る範圍を超えては「連續」と言ふことは唯考へられたものたるに過ぎないのであつて、ベルグソンの如く不斷無休に持續するものではないのである。從つて吾人の日々の日常的經驗世界の持續（或は同一）と言ふことも亦一つの活動寫眞的構成であらねばならぬ。

劇、音樂等の美的對象が時間過程に於て構成されるものであることは甚だ明かであるが、繪畫、彫刻等に於ける美の成立も全く時間に關係が無いと言ひ得ないであらう。制作の場合は元よりであるが、享受鑑賞の場合にも繪畫なり彫刻なりに面した瞬間一瞬にして其の美が成立すと言ふ可きものではなく、多くは其間に多少の時間を要するのである。（而して此場合極めて短かい時間の間に於てゞはあるが、其の美の成立迄には制作の場合に相似たる經過が行はれるのではないかとも考へられる。）少くとも畫面形造に面接した瞬間より美に關する經驗が次第に推移變化するものであると云ふことは否定することの出來ない事實であらうと考へられる。而して其の繪畫、其の彫刻の本來的に要求する美は其の間に於て次第に成立し、少許時間持

續し、やがて次第に解消に向ふのであると考へられるのである。（かく直接經驗に於ては畫面と美とは直に同一ではなく、從つて其の美がその畫面に不動に固定せられてゐると見ることは出來ない。直接經驗に於ては畫面其者が定在でなく「生住異滅」するのであるが、美はまた之れと幾分異りて「生住異滅」するのである。）

㈠ Poincaré, La Valeur de la Science p. 133（邦譯 163頁）

㈡ ibid.

㈢ Kant, Prolegomena, S. 10.

㈣ Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, 3te Aufl. S. 152.

㈤ Poincaré, La Science et l'Hypothèse, 大塚博士「美學及藝術論」中の造形美術論等參照。

㈥ Poincaré, La Valeur de la Science, Chapitre IV, § 6.

㈦ Wundt, Logik, Bd. I. 3te Aufl. S. 468.

㈧ Lorentz-Einstein-Minkowski, Das Relativitätsprinzip, S. 55.（Minkowski, Raum und Zeit.）

㈨ Cohen, Logik der reinen Erkenntnis, 3te Aufl. S. 193—199.

㈩ Poincaré, La Valeur de la Science pp. 129—133.

(十一) op. cit. p. 133.

(十二) Bergson, L'Evolution Créatrice.

(十三) op. cit. pp. 22—24; pp. 356—357.

六

以上に於て吾人は時間と實在との關係を、其の正しき關係に於て考察せんとしたのであるが、時間の考察には更に時間に關して普通に行はれる錯誤或は假象を照明批判することが必要ではないかと考へられる。然るに其等の錯誤或は假象の基く所は實在(卽經驗)に於ける直接なるものと間接なるもの、基礎的なるものと派生的なるもの、方法と體系(所產)、論理的關係と時間的關係等々の混同順逆交叉「立場の混同」等にあるのであるから、此等の關係を充分正しく判明に辿つて行くならば、其等の錯誤或は假象は自ら釋明せられることゝなるであらうと考へられる。以下試みに其の二三に就いて考察して見度いと思ふ。

先づ論理的關係と時間的關係との混同によつて生ずる錯誤の例としてはカントの圖式論が擧げられ得るのではないかと考へられる。圖式論に於ては時間が一方範疇と、他方現象と同種的である、從つて時間は兩者の媒介を成す(概念の現象への適用を可能ならしめる)とせられてゐる如くであるが、若し之れが物理的時間が物理的現象の構成原理の一として參加作用することを意味するものであるならば、其は或る程度迄正當でなければならぬと考へられるのであるが、然しカントに於ては此論理的構造が充分判明に考察意識せられて居たと考へることは恐らく困難であらう

と考へられること前述(第四節)の如くである。又時間が「一面には知性的で他面には感性的」、「一方範疇と、他方現象と同種的」であるとしても、それは唯知性と感性、範疇と現象との結合の可能を示す一つの例を成すに止まつて、それが其の故に他の(如何なる種類の)概念と現象との間の媒介を成すとすることの出來ぬことは甚だ明かである。而して實際圖式論に於ても時間のかゝる論理的構造が媒介性の基礎として考へられて居るのでは無く、其の所謂「一方範疇と他方現象と同種的」と言ふことは寧ろ概念の論理的統一と時間の直觀的統一との類比を意味するものではないかと考へられるのである(例へば「悟性概念は多樣の純粹綜合的統一一般を包括する。時間は內感の多樣の、從つてあらゆる表象結合の形式的制約として純粹直觀に於ける先天的多樣を包括する。㊀」等。)「却說先驗的時間限定はそれが普遍的であり且或る先驗的な規則に基く限りに於て、(時間限定の統一を成す所の)範疇と同種的である。然し他方に於ては時間は多樣のあらゆる經驗的表象に含まれて居る限りに於て現象と同種的である㊁」と言ふ場合に於ても時間の論理的構造が主たる關心として考へられて居るのではなく、たゞ其の範疇的一面と感性的一面とが他對象との類比に於て考へられて居るに過ぎないのではないかと考へられる。また「現象と同種的」であると言

ふことも時間の感性的特性を意味するものであるか或は「多樣のあらゆる經驗的表象に含まれて居る」と言ふ普遍的結合性を意味するものであるかゞ明かでない。從つて「それ故に範疇を現象に適用することは悟性概念の圖式として前者の下への後者の包攝を媒介するところの先驗的時間限定によつて可能的であるであらう」(三)と言ふ結論も概念の論理的統一と時間の直觀的統一との類比によるものであるか或は時間の現象との普遍的結合性によるものであるかゞ明かでない。此兩者の何れにしても其處に對象性(概念と感性との結合)の論理的構造と現象の時間的關係との混同が認められるのではないかと考へられるのである。今若し前者であるとすれば時間の直觀的統一が一般對象の概念と感性とを媒介するかの如くなるのであるが、其の實際然らざることは甚だ明かである(現象の單なる時間的推移と對象の論理的構造とは平面を異にするのである)。又若し後者であるとすれば時間の普遍的結合性卽ち現象の單なる時間性が概念と感性との論理的結合を媒介すべきことゝなるのである。(然し之れと同時にカントに於ては時間が純粹なる感性形式ではなく範疇的要素を含むのであるから、時間の媒介性と言ふことの中にまた構成原理としての意味が伏在しなければならぬことは否定出來ないことであり、圖式論の論考の間

にも之れが充分認められ得るではないかと考へられるのである。)

基督教に於ける審判の思想にも亦此種の錯誤が認められるのではないかと考へられる。審判は論理的意義に於ては現在直接の事として考へられ得るのであつて、例へば「彼を信ずる者はさばかれず信せざる者は既に審判かれたり」(約、三ノ十八)、「斯世はいま審判せらる斯世の主はいま逐出さるべし」(約十二ノ三一)等と言ふは之れであらうと思ふ。然し審判はまた他方因果應報的に之れを時間的に考へることも可能であると考へられる。今之れを末日の審判として一擧劇的に考へる所には其の論理的意味と時間的應報の意味との二者が一に混同せられて居るのではないかと考へられるのである。

時間其者の錯誤に於て著しき例はオーガスチン(Confessiones)の時間測定の考察ではないかと思ふ。一方に於ては物理的時間が唯一の時間性として獨斷思惟せられ、他方に於ては內省によつて心理的時間(從つて眞の時間性)が觀察せられつゝあるのである。此處から解決し難き矛盾(測定に關する)が生ずるのであると考へられる。

假象の內にて最も著しきものは心理的時間である。意識は全實在と一致結合すべきものであつて何等空間或は物質內に閉ぢ込めらるべき性質のものではないの

であるから、意識を身體內に宿るもの(卽ち所謂「精神」)として考へることは一つの假象でなければならぬのであるが(カント或は佛敎等は此假象を打破したものと考へられる)、心理的時間は通常此身體內に宿る精神の一與件として考へられるのである。從つて其は所謂「主觀的」なるものとせられ、「客觀的」時間なる物理的時間に比して遙かに價値低きものとせられるのである。物理的時間は悠久無限、心理的時間は須臾の事とせられ、また個人精神は須臾にして死するも世界は無窮に存續す等とせられるのである。(宗敎信仰の關する「形而上學」的時間の如きも、其の正當なる意義が認められずして、物理的時間の推移中に於ける一瞬の夢なるかに見做されるのである。)

眞の時間の有限性のみを形而上學化して、無數の微分的斷片を連ぎ合したるが如き時間を考ふるが如きも(エドアルト・フォン・ハルトマンのKategorienlehre、ハンス・ドリーシュのOrdnungslehre等)同じく一種の假象と言ふ可きものであらう。

以上に於て吾人は本書の所謂直接經驗說の立場から、時間と實在(其の「全體」、其の諸實在要素竝に諸實在對象)との關係及其の攻究の方針方法を明かにせんとしたのであるが、猶以上の如き關係が吾人の經驗に於て存在すると言ふことは哲學上如何な

る立場を取るものに於ても(所謂實在論等に於ても)、必ず認めなければならぬ事であると考へられるのである。

㊀ Kant, K. d. r. V., 2te Aufl. S. 178.

㊁ ibid.

㊂ ibid.